

〔E類多文化共生教育コース 対象〕

前期

小 論 文

令和7年度
一般選抜前期日程
私費外国人
帰国生

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子を開かないこと。
2. 解答用紙は2枚ある。それぞれの解答用紙の受験番号欄に受験番号を記入すること。
3. 問題冊子は、試験終了後に持ち帰ること。

I 次の「共生」という概念をめぐる文章を読んで、下の問いに答えよ。

近ごろ、「自然との共生」が流行りである。どの都市の「町づくり」にも「自然と共生する町づくり」がうたわれている。

しかし、今日の生物学では、「共生」という概念に疑問が感じられている。昔考えられていたように、生物たちは生態系というひとつのシステムを成しているわけではなく、それぞれの種を維持するための社会組織があるわけでもないらしいからである。

すでによく知られた「利己的遺伝子」論が言うように、生物の個々の個体は、それぞれが自分自身の遺伝子をもった子孫をできるだけたくさん後代に残そうと努力している。そのためには他人の子を殺すとか、たとえ自分の子であっても、ひよわで先の望めない子は見捨てて、母乳や食物の無駄な投資を防ぐとか、自分のメスの体内にある他のオスの精子をかき出すとかいう「残酷な」行動も辞さない。助けあって種族を維持していこうなどという様子は見られないのである。

共生と言われるものについても同じである。よく例に出される花と昆虫の場合で言えば、花は自分の子孫(種子)をできるだけたくさん実らせるために、昆虫を利用して花粉を運ばせようとする。蜜をつくるのはコストがかかるから、本当は蜜などつくりたくはない。しかしなにもないと虫が来てくれないから、しかたなくすこしだけつくる。それをできるだけ吸いにくくして、虫が努力している間に花粉がたっぷり虫の体につくようにしている。

昆虫のほうは、植物のために花粉を運んでやる気などさらさらしない。欲しいのは蜜だけである。けれど植物のほうは蜜を花の奥深くに隠しているから、懸命になってもぐりこんでいくか、口吻を長くして吸いやすくするほかない。

進化の長い時間の間、花と昆虫の間で、このように「利己的」なせめぎあいが続いた結果、今日見られるような花と昆虫のみごとな「共生」ができあがった。昆虫が口吻を長くして、遠くからでも蜜が吸えるようになっていくにつれて、花のほうも細く長く形を変えて、昆虫の頭の先にいやでも花粉がついてしまうように進化した。だから今日の「共生者」たちは、お互いにうまく適合している。しかしそれは、はじめから互いにうまく助けあいましょうね、と言って始まったことではないのである。

このことを念頭に置いて、流行りの「共生ファッション」を見ていると、いったいこれでよいのだろうかと心配になってくる。これで本当の共生が実現できるのだろうか？

今述べたとおり、自然界での「共生」は、互いの利己のせめぎあいの上に成り立っている。人間が建物を建てるのは人間の利己である。人間の目的に沿うように、そして多くの場合、建築家のアーティストとしての満足感を満たすように、建築物は建てられる。

問題なのは、これがまったく一方的で、そこになんのせめぎあいもないことだ。

これも近ごろ流行りの「環境にやさしい」「地球にやさしい」建築物は、環境との調和をはかったとか、環境を汚染しないように配慮した建物ということであるように見える。けれど、ここで言われる環境とはなんなのか？

考えてみると、環境とはきわめて漠然としたことばである。必ずしも自然を意味してはいない。大都市の中心部だったら、ビル街が「環境」である。田園地帯だったら、人間が開いた田んぼが「環境」である。けれど、ふつう「環境」と言うときには、多少とも自然なままの林とか山とか川とかを指していることもたしかである。だからそこに人間の手が入ると「環境破壊」と言われるのだ。

(中略)

人間が建築物を建てるときは、土地を更地にして、そこに建てる。建物の下から木が生えてきたりしたら、それこそ困る。そして建てた建物からは、自然の影響を極力排除しようとする。屋根や屋上に草が生えたら困るし、スズメが巣をかけても困る。そのようなことのない設計をせねばならない。これは人間の論理であって、建築物をつくるなら当然そうでなければならない。

問題は、建物のまわりである。環境にやさしく、自然にやさしくというのなら、建物のまわりは緑にしなければならない。

人間の論理と自然の論理のせめぎあいを期待するなら、ここしかない。

ふつう、緑というとまず芝生だ。これはたしかに緑ではあるけれど、自然の論理は完全に排除されている。芝生があっても、いろいろな草の種子がたえず風で飛んでくる。芝の間に落ちた種子は芽を出したい。芽を出して、花を咲かせて、自分の子孫を残したい。しかし、人間の論理は芝生を管理して、美しい芝生として保とうとする。

そこで、生えてきた「雑草」は引き抜かれてしまう。

芝生には木も植えたほうがよい。そのほうがいかにも自然らしく見える。しかし、この木も管理せねばならぬ。整然とした庭木を配してこそ造園である。ここでも人間の論理が勝って、自然の論理はつぶされる。したがって、二つの論理のせめぎあいは起こり得ない。

自然界に見られるみごとな「共生」が、じつは二つの生物のもつ異なる、そしてそれぞれに利己的な論理のせめぎあいの結果として到達されたものであるとすれば、人間の論理だけで作りだされた緑の庭は、けっして共生とは言えない。それは疑似共生にすぎない。人々が疑似共生を共生だと思いこんでしまうようなことになったら、人間と自然、人間と環境の共生など、ますます遠のいてしまうだろう。

(中略)

人間は人間の論理で生きてゆくほかはない。建築は建築の論理にしたがってゆくほかはない。しかし同時に、そこにはほかの生きものたちの論理があり、自然の論理もあるのだということを忘れてはなるまい。

人間以外の論理はつぶしてしまったほうが楽であり、そのほうが整然として美しく見える。しかし、共生とは、異なる論理のせめぎあいの中で生まれてくるものであり、そうであるからこそ、そこに従来とは異なった新しい美も生まれてくるのかもしれないのだと思う。

(日高敏隆著『人間とはどういう動物か』ちくま学芸文庫、2013年。一部改変)

問1 下線部「人間は人間の論理で生きてゆくほかはない」と表現されていることについて、なぜそのようにせざるを得ないのか、あなたの考えを200字以内(句読点を含む)で述べよ。

問2 本文章は「自然と人間の共生」のあり方について述べられているが、「人間と人間の共生」については触れられていない。この側面に関して、「利己性」という語句を用いて、あなたの考えを500字以内(句読点を含む)で述べよ。

Ⅱ 次の文章は日米修好通商条約批准書交換のため1860年にアメリカに赴いた、幕府使節団の副使であった村垣範正淡路守と初代アメリカ駐日公使タウンゼント・ハリスについて描写したものである。これを読み、2つの問いに答えよ。

村垣は行動の記述全体を通じて一度も第一人称単数代名詞を用いず、つねに行動を複数で記録している。彼はなんであろうと、自分から行動を起こすことは決してない。何が行われようとそれは集団による努力であり、全体が集団によって計画され実行された。

しかし村垣でさえ時にははっきりと意見を述べねばならないこともあった。この行動は必然的に単数で表わされた。そのようなひとつの考察は、村垣が自分の通る道筋にそって使節一行を見ようと集まった大群衆を見て感じた誇りについてのものである。「かかる胡国に行て皇国の光をかかやかせし心地しおろかなる身の程も忘れて誇り貌に行もおかし。」この件に関して彼が新見と小栗の代弁をしているとは思えないので、この誇りは村垣自身が感じたものであることは確かである。同時に一人称の特質をもつこの経験は、彼の誇りの公的で非個人的な性格を媒介としている。村垣はその時、アメリカで大いに注目を浴びている皇国の一員であったという理由だけで誇りを感じたのであった。

同様にこの儀式についての村垣の簡略な記述、すなわちアメリカ人の「無秩序」に対する失望感と、その日の出来事のある満足感に、自分の感情を交えるまでにはいたっていない。村垣個人は、使節が全体としてなんらかの使命を果たしたことで満足している。文体にはこのような立場にあるすべての人に共通と思われる型にはまった用語が多く使われている。村垣がうれしく思うということは社会から規定されているので、村垣自身うれしいのである。個人が自分の属する集団の幸福と成功を誇りに思うという修辭的な心理操作が、19世紀から20世紀の今日までずっと強力に継続しているのだが、我々は、同様のものをここにみることができる。

この場合、村垣が表現している「感情」は、すべて公的感情である。彼は確かに参加してはいるが、その基本的に公的な反応には完全に個人的体験を生み出す触媒となるものがほとんどなく、使節としての役割を別としては、個人はまったく存在しないかのようなようである。

日記を通じてみられるハリスの自信を、これと比較してみよう。彼もまた誇りを感じたにちがいないが、ただアメリカの「栄光」にだけ誇りを感じたのではない。彼の誇りは、むしろ独力で両国間に外交関係を樹立した彼自身の業績にある。彼は日本の最強の武士団の中で、ただひとり非武装のアメリカ人である。しかし彼は、自分がつねに東インド艦隊の強力な存在に守られており、幕府の役人全員がこの事実をいつも心に留めていることを知っていた。彼はわざわざ、誇りをもっているなどと言明する必要はない。それは言うまでもないことだからである。事実ハリスは、アメリカの公式代表としての職務を果たしている間でさえ、ありのままの親しげな態度をとっている。彼は井上信濃守清直^{きよなお}を「私の友人」と言っている。川路左衛門尉聖謨^{としあきら}と交わした冗談は、気さくで打ちとけたものである。手短かに言えば、将軍との会見という儀式的形式的行動はすべての感情や反応をなくしてしまうほどハリスを圧倒し、当惑させてはいない。

これら二つの記録の大詰めは印象的である。ハリスは全力をあげて儀式を行った。彼は緊張してはいたが、はじめに自分の状態を述べるのではなく、会見そのものに注意を集中した。しかし彼はひとたび行事の報告を書き終えると、極度に疲労していることを当り前のこととして自認した。彼は国際的に多くの利害がかかっているこの行事を終えて家に帰ると、慢性の「肺充血」のため倒れた。彼は肉体的にもまた精神的にも非常な努力をしたのであった。そして結果はかなりひどい病気となった。語り手であるハリスは病に倒れたと述べる時、率直で個人的である。この語り手こそ、常に個々の経験に個人の継続した存在(つまり自己)をもって対決しようとし、自民族中心主義の、しかも同時に人道主義の立場をとるほとんど典型的な19世紀の白人である。

村垣の結末はどうであろうか。彼もまた、きわめて緊張したにちがいない。しかしその日、彼の「個人としての体験」がなんであっても、彼個人の存在は作品の中のどこにも見当たらない。彼は自分自身の行動を説明する唯一の様式として、非人称、公文書形式を必要としている。村垣はその日の日記の最後に和歌を詠んでいる。村垣の二首の和歌は公的、客観的であり写生風であるが、叙情的ではなく、儀礼の行事を果たしたことへの集団としての満足感を表現しており、19世紀の西洋人の書いた詩とはまったく異質である。一行は今日とどこおりなく任務を果たした。故国のさらに多くの地位の高い人びとは今日の出来事を聞いて満足してくれるであろう。このような形

式的な文章にふさわしい形式的結末である。儀式は海を越えて「日本国家そのもの」によって行われた。ハリスがひとりでミカドの国の高官と会ったのち、体が弱り病に倒れたことを告白しているのと対照的に、村垣は様式化した一般的和歌でアメリカでの行事を祝っているが、これは多分当時も今も、二つの文化がもたらすこのような対照を、もっとも的確にあらわしているのではないだろうか。

(マサオ ミヨシ著, 佳知晃子監訳『我ら見しままに 万延元年遣米使節の旅路』平凡社, 1984年。一部改変)

問1 村垣とハリスの儀式に臨む態度や儀式後の結末には、どのような対照性があったと筆者は論じているか。個人・公・集団の3つの言葉を使用して、200字以内(句読点等を含む)で述べよ。

問2 本文のように日本とアメリカの文化を対照的に描くことは、文化に内在する多様性やひとびとの個性を埋没させることにもつながりかねない。このことについてどう考えるか、あなた自身の考えを500字以内(句読点等を含む)で述べよ。